

下園りさ・木田綾子編著 『カフカふかふか とっ
ておきの名場面集』

重竹, 芳江
佐賀大学

<https://doi.org/10.15017/7405144>

出版情報：九州ドイツ文学. 39, pp.85-86, 2025-12-26. VEREIN FÜR GERMANISTIK-KYUSHU
バージョン：
権利関係：



下菌りさ・木田綾子編著 『カフカふかふか とっておきの名場面集』

重 竹 芳 江

カフカの作品は読書会にぴったりだ。「これ何?」「どういうこと?」「裏にあるのは何なんだ?」「???」と謎につぐ謎に巻き込まれるのがカフカの魅力で、一人で読むのももちろん悪くはないが、他のメンバーの考えを聞いて「なるほど!」と感心したり、「えー、そう?」と反論したりする方が断然楽しい。本書は「カフカ研究会」の皆さんがサナトリウム(=日本の温泉)でカフカを偲びつつ夜中まで熱く討議された末に生まれた産物だという。いわばアカデミックな読書会から誕生した一冊。「フランツ・カフカの魅力を中高生から大人まで、もっと広く知ってもらいたい」という意図で刊行されている。「カフカ研究会」の設立は1978年。西日本地区の5人の独文学者によって立ち上げられた研究会には現在は地区の枠を超えた十数人の研究者が集う。本書『カフカふかふか』はカフカの没後100年を記念して昨年2024年に刊行された。

まず、「カフカふかふか」というタイトルが効いている。本書の「はじめに」ではふざけているんじゃないんだよと弁明されているが、カフカふかふか、思わず手に取ってみたいくなる心地よい響きである。ふかふか雲にカフカふかふかがふかふか浮いているシンプルかつシックな装丁もすばらしい。書店の平積みになった本の中でぱっと目に飛び込んできた。

内容を見ていこう。本書にはカフカの作品あれこれから54の「とっておきの名場面」が作品の引用とその引用箇所を起点とする解説という形で提示されている。54の名場面はつぎの5つに分類されている。

- i こんなはじまり、あんなはじまり 冒頭の一文に引き込まれる
- ii こんなキャラ、あんなキャラ 作品の登場人物たちに翻弄される
- iii こんな世界、あんな世界 物語の設定に目がまわる
- iv こんなカフカ、あんなカフカ 作家の素顔に驚愕する
- v こんな終わり、あんな終わり 結びの一文に絶句する

『変身』より選ばれたのは以下の4場面である。

「ある朝、グレゴール・ザムザは不安な夢から目覚めると、自分がベッドの上で巨大な〇〇に変身しているのに気づいた。」(i-1, P. 8)

「わたしたちアレを厄介払いする努力をしなきゃダメよ。」(ii-4, P. 56)

「容赦なく父親は突き進んできて、野蛮人のようにシッシッと声を発するのだった。」(iv-2, P. 119)

「電車が目的地に着くと、娘が最初に立ち上がり、若々しい身体を伸ばした。」(v-3, P. 151)

どの場面も記憶に焼きついていたので、本書を読みながらうれしくなった。

小説冒頭の「巨大な○○」は確かに翻訳に困るだろう。その昔、ドイツで留学生用の授業の一環で『変身』を読んだ。Ungeziefer とは何かということになり、各人が絵に描いて貼り出すことになった。なかなか難しかったが、ごく普通の昆虫みたいなやら怪獣みたいなやいろいろ出てきてびっくりした。勝手に悪魔の角みたいなのをくっつけている人もいた。カフカは角が生えているとは書いていないけれど、角が生えていないとも書いていない。読む人の自由である。翻訳者であればどれか一語に訳語を定めなければならないが、本書の「巨大な○○」というクイズを通して、カフカの望み通りにイメージが自由にふくらみそうだったと思った。

妹の「変身」は切ない。「天使のように優しい妹」「扶養家族として庇護されるばかりの子どもだった妹」は「しっかりした発言権を持つ大人」に変身すると同時に兄をモノ扱いする。かわいそうなグレゴール、やはりこれが応えて息絶えたのか。父親は最初から変身したグレゴールに冷たかったからリングくらい投げつけても不思議はない。致命傷を与えたのはやはり妹か。最後の一文でグレゴールから解放された一家が、特に妹がうーんと伸びをして自由を享受するのはなんと印象深い。

続いて『断食芸人』から紹介されている場面である。

「自分の口に合う食べ物を見つけることができなかったからなのです。」(iv-5、P. 128)

これが断食芸人が断食していた理由であり、そのために衰弱して死んでしまう。同じく食べられるものを見つけられずに餓死したグレゴールを思い出しながら読んでいたが、断食のモチーフはカフカの健康意識と結びつけて解釈されているとのことだ。真冬でも窓を全開にして真っ裸で体操をする健康法、栄養を取らねばならない結核にかかりながら健康のためにベジタリアンを貫くなど、健康を目指して結果として不健康になるねじれで、これは『巣穴』に通じるものがある。

「わたしは巣穴をこしらえた。[...] その巣穴といたら、この地上で実現しうる限りの安全さで守られている。」(i-7、P. 25)

巣穴の住人はアナグマのような動物である。完璧な巣穴をこしらえたというのに、自分が中に入ると敵が入ってくるのがわからないから安全確保のため巣穴の外に出て巣の出入口を見張っている。中にいればこの上なく安全な巣穴、でもその安全を確認するために中にいることができないというのはどういうわけなのか。手段と目的が入れ替わって行き詰まるのはいかにもカフカっぽいような気がするが、名場面をこれだけ取り揃えて出されるとあれやこれや太く細くつながっていき、それがとてもおもしろい。本書を読んで、前後が気になり久々に全体を通して読んだ話がいくつもある。「あとがき」は「この本が作品を手取るきっかけになりますように」と結ばれている。はい、しっかりとこの手に。

(白水社、2024年)